

男子大学生の同居意識 (1) - 老人問題の認知度と同居意識について -
 大阪教育大 岸本幸臣 甲子園短大 ○矢沢正子

目的 本研究は高齢化社会における好ましい住生活を実現するための住宅計画上の課題を探るために、前年度に引き続き、近い将来結婚し世帯形成する男子大学生を対象に老親との同居意識や住生活の志向を把握したものである。

方法 阪神間の私立大学生(3年生)132名を対象とするアンケート調査を実施した。アンケートは直接配票・直接回収方式を用いた。(調査実施時期;昭和57年12月)

結果 (1)調査対象の属性;調査対象者の平均家族人数は4.3人である。現在3世代同居をしている層は約2割であるが、同居を体験した層は全体の約半数に達する。(2)老人問題の認知度;老人問題を身近な問題と受けとめる層は6割である。日本人の平均寿命・3世代同居率及び諸外国と比較した我々の長寿化傾向については、約半数が正確に認知している。老人問題の3大要因とされる「貧困」「病弱」「孤独」についても的確に認識しており、特に老人を「孤独」な存在と受けとめる傾向が強い。(3)同居意識;結婚当初は親との別居を志向する層が多い。しかし、家・財産の継承に関わりなく同居を志向する層が6割を占め、いずれは同居が必要と考える層が一定量存在するとみられる。こうした親との同居志向は3世代居住の層に一層顕著である。従って男子は、同居の条件、現状の家族形態に関わらず別居志向の強い女子とは異なる志向特性を有していると言える。一方、自分の子供との同居志向が7割と高率である点は男子にも共通した傾向である。その結果、男子は親子両者に対し一貫した同居志向を示す層が4割を占めるが、女子は親とは別居・子供とは同居といふ自己矛盾した意識の層が約半数に達している。